

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳
『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション2 北アフリカ第二部—トリポリタニア，チュニジア，アルジェリア，モロッコ，サハラ—』
古今書院 2016年1月 878頁 23,000円＋税

本シリーズ既刊の「東アジア」¹⁾ (以下、前巻とする) に続き、第2巻として、北アフリカのうち現在のリビア以西を扱った部分が刊行された。原著『新世界地理—地球と人間—』²⁾ では、1886年刊行の第11巻にあたる。

著者のエリゼ・ルクリュ (1830～1905) については、すでに前巻の拙評³⁾ (以下、前稿とする) にて略歴を紹介したため、ここでは重複を避ける。ただし、ルクリュに関して、前稿執筆以降に管見にふれたものを二つあげておきたい。その一つは、ルクリュも参加した1871年のパリ＝コミューンを詳細に記した大佛次郎の『パリ燃ゆ』に、その名が幾度か登場することである。すなわち、彼がカール・マルクス (1818～83) の『資本論』をフランス語に訳そうとして果たさなかったこと⁴⁾、彼が降伏して捕虜になった際の隊長銃殺の状況を後に手紙に記したこと⁵⁾、その後、囚人として各地を転々とし、スイス国境で釈放されるまでを詳細に書き残したこと⁶⁾ がえがかれている。とくに囚人移送の場面では、「市民エリゼ・ルクリュ」が「私たちに向って毎日、面白くもあれば有益な講義をして、佻しい私どもの滞在を、我慢できるようにしてくださいました」⁷⁾ というベルギー紙掲載の一捕虜の手紙が引用されている。もう一つは、間宮海峡の名称にちなむ吉村昭『間宮林蔵』内の記述である。同作品の末尾に、「シーボルトの命名になるMamiya-seto (間宮海峡) という名称が不動のものになったのは、1881年 (明治14年) に刊行されたフランスの地理学者エリゼ・ルクリュの『万国地誌』 [『新世界地理』をさす…評者注 (以下同様に表記)] 第6巻「アジア・ロシア」によるものであった」⁸⁾ という一文があり、原著の本シリーズがヨーロッパで広く人口に膾炙していたことを物語っている。

さて、本巻の章構成は下記の通りである (括弧内の頁数は訳書のもの)。

第1章 トリポリタニア (132頁)

第2章 チュニジア (151頁)
第3章 アルジェリア (348頁)
第4章 モロッコ (126頁)
第5章 サハラ (98頁)

頁数を一見して気づくのは、アルジェリアの占める割合の大きさであり、本巻の約4割に相当する。これは、1830年以降、アルジェリアがフランス初のアフリカ領となり、本国との関係が密接であったことの反映であろう⁹⁾。評者の私事にわたるが、2016年に在外研修でフランスに滞在した際、マルセイユのヨーロッパ地中海文明博物館にて開催中の「Made in Algeria—領土の系譜—」展を見学する機会に恵まれた¹⁰⁾。そこでは、17～20世紀のアルジェリア各地をえがいた地図が数多く展示されており、さながら地図展のようであった。当時の地理学や地図作成が植民地支配と深く結びついていたことを、現代の視点から改めて振り返る好企画であった。なお、アルジェリア以外では、チュニジアが原著執筆直前の1883年にフランス領、西サハラが1884年にスペイン領となっており、以後、1911年にリビアがイタリア領、翌1912年にモロッコがフランス領 (一部スペイン領) となっている。

「訳者あとがき」でも解説されているように、本巻ではアルジェリアに関して、「原理的な反植民地化 (反帝国主義) 思想は明記されていないと言ってよい」(877-878頁)。本文では、「アルジェリアはカナダ同様に入植の土地であり、海の向こうのフランス延長部だ」、「アルジェリアはフランスに与えたよりも、はるかに多くを受け取ったのであり、同国の住民は、同等には扱われていないにもせよ、トルコ人の支配期に比べ多くの点で自由を獲得した」(287-288頁)、「ヨーロッパへのアルジェリアの政治的併合は、否定的な見解がしばしば繰り返されたにもかかわらず、もはや歴史的事実である」(292頁) などと、植民地化を擁護・容認するような記述がみられる¹¹⁾。ただし、手放しでの植民地化礼賛ではなく、「アルジェリアの現地住民がヨーロッパの制度を受動的、ないし平和的に承諾するかどうか」は、「彼らに保障される正義によって増減するのではないだろうか」とし、植民地化がもたらす同化は、「ものごとを同じに考えると、同一の言語を話すとか、

首都の習慣やしきたりに統一されるとかではなく、相互の尊敬と権利の尊重に立脚する」(293頁)ものと述べて、いわば理想主義的な姿勢をとっている。また当時、「ヨーロッパ植民地帝国への政治的併合」が「諸国の議会において嫉妬深い狂熱的議論のひとつ」であったモロッコに関し、「なぜ我々は彼らに手本を示そうとせず、人間味と正義をもって扱わないのだろうか」(673頁)と、文明化の文脈にそぐわない植民地化には批判的だったことが読み取れる。

そのような植民地化の進展を、一段深いところからとらえているのも本巻の特色であり、「アルジェリアの大地は、剣よりも、すぐれて犁でもって征服された」(288頁)、「征服の初期における軍の主な成果は軍用道路の開通だった。アルジェリアは武器よりもはるかに多く道路によって征服された」(605頁)といった言葉が印象的である。また、「キリスト教徒旅行家による探検が、すべからず軍事征服を容易にする結果を招き、最初の平和的な先行者が踏み固める道は、遅かれ早かれ軍隊が辿ることになる」とするモロッコの住民の考えが、「あながち誤りではない」(636頁)と、地理学的探検と植民地化の連関を評している。植民地化が最も可視的な形で示される農地の変化については、アルジェリアのムスリム住民からヨーロッパ人へという土地取引に関し、「残念なことに、多くの事案で投機家は現地住民の無知につけこみ、合法的な形式で土地をかすめとって利益を得」、「土地所有に関する諸問題がいまだに錯綜し、所有権の確立が困難なことに、直接の利益を見出している現地企業は多い」(598頁)と厳しい筆を加える。チュニジアでも、「1861年以後はおびただしい外国人がムスリム住民から土地を買い上げ、大農園主がブドウのみを投機対象としたために、「農業は性格を変え、おもに工業的な営みになった」。現地人の日雇い労働者や大農園で労働に従事するコロン〔入植者〕は「正真正銘の農奴」であり、「本来は肥沃な国土であるにもかかわらず、チュニジアの人口はしばしば飢饉に襲われ」る事態をまねいた。他方、チュニジアの「商業面での併合の帰結は、とりわけ地場の小工房での仕事が海外工業に押されて衰弱したこと」であり、「蒸気船をもつ大型の船会社群や、とりわけ国家補助を受けた船会社が定期的に沿岸を運航]

するため、「小型帆船が運ぶものは何も残らない状態」(272-274頁)となるなど、植民地化が多方面に及ぼす影響を冷徹に見通している。

もっとも北アフリカとヨーロッパの出会い、はるか古代にさかのぼる。北アフリカに点在するローマ遺跡に関しては、トリポリタニアのレプダ(レプティス・マグナ)(81-83頁)やチュニジアのエル・ジェム(216-218頁)などが詳しく紹介され、アルジェリアのボヌ(現、アンナバ)郊外にある「寄せ集めの部族」の集落がローマ帝国の国境地帯という意味でストラスブールなどと類似する(402頁)と述べている。さらにそれを遡った時代についても、チュニジアに多い巨石建造物が、「ブルターニュやアンダルシア地方の住民とおなじ起源、ないし宗教の人々がかつて暮らしていたことを想起させる」(185頁)と記す。これらの記述自体は価値中立的ともいえるが、帝国主義の時代にあつて、過去のローマ帝国による北アフリカ支配(ないしそれ以前の時代)が一つの参照軸とされていたことは否めない。アルジェリアの人口趨勢をめぐって、考古学者たちがローマ人墓地の碑銘から当時の長命ぶりを提示し、それと刊行時の人口統計に基づくヨーロッパ人の風土への適応を対応させて記述している(576頁)のは、その一つの典型例である。

ルクリュは本巻の叙述にあつても、多くの文献にあたっている。その中には、古代ローマの地理学者ポンポニウス＝メラ(1世紀)や、イスラムの地理学者アル＝イドリーシー(12世紀)、同じくレオ＝アフリカヌス(16世紀)といった地理学史上著名な人物も多い。サハラを扱う第5章では、「フンボルトは、このアジア・アフリカの沙漠全体に「極風の流路」の名を与えた¹²⁾」(762頁)、「カール＝リッターが好んで繰り返した「サハラは世界の南である」という言葉」(771頁)など、近代の地理学者の叙述も参照している。こうした地理学的探検・研究の蓄積をふまえ、前巻同様に、数多くの図版(160葉、ほかに口絵3葉)や挿画(83点)が収められている。

原著執筆時にあつて、上記以外にもヨーロッパ人はさまざまな形で現地に関与していた。目につきやすいところでは、チュニス新市街における「あらゆる民族があらゆる服装で行き交う。帽子をかぶったムスリムもいれば、ターバンを巻いた

キリスト教徒もいるといった具合で、ふたつの文明の接触による産物である」(244頁)との描写のように、異種混濁的な風景が展開されていた。アルジェリアでは、ライオンやヒョウといった猛獣を、「奨励金目当てにせよ、スリルを味わうためにせよ、狩猟家が執拗に追跡するため」に、「動物種の均衡に対する深刻な障害」が引き起こされ、「イノシシが激増し、耕作地に甚大な被害が及んで」(363-364頁)いた。このように植民地化の影響を生態系にまで広げてとらえることは、地理学的視点の真骨頂といえよう。

一方、ルクリュは風土に根ざした現地の景観には高い評価を与えている。例えば、チュニスに関する記述の中で、「フランス人街の整然とした街路に対し、旧市街の道は興趣の点でも、意外さの点でも優れている」と比較し、「ムーア風の家屋のうち、付属のアーケードやアラベスク模様を破壊し、醜い石造りの方形に変貌させても、いっそうの空気や、陽光や、快適性をそなえるようになるものは、ほとんどないだろう」し、そうした伝統的建築が「失われるままに放置するのは、恥ずべき所業というものだ」(242頁)と断罪している。フランス人建築家の手によって「ほとんどどこでも、アラビア風の美しい家屋は、整然とした陳腐な正面が並ぶ街路で隠され」(386頁)るようになったアルジェリアの諸都市、あるいは「街路は清潔だという長所があり、この点ではこのモロッコ都市[モガドール(現、エッサウィラ)]は、ヨーロッパの多くの都市よりも優れている」(717頁)などの記述も、同様な見方に基づく。

北アフリカの人文地理的特徴として、イスラム教を外すことはできない。しかし、本巻を読むと、単純な「一神教」という認識を覆すような記述が随所にあられる。チュニアのカルタゴでは、1842年にフランス王ルイ＝フィリップがルイ9世¹³⁾(聖王、在位1226～70)に捧げた礼拝堂を建てたが、「現地の言い伝えによると、このフランス王は死去する前にイスラームに改宗し、「ブー・サイド」すなわち「父たる主君」の名でアラブがいまも尊宗[尊崇]するのは聖王ルイのことだという」(250頁)とある。また、同国ベジャ「最大のモスクはシーディ＝アイッサ、すなわち「イエス殿」を祀るもの」(260頁)であった。

イスラム教とフランスの関わりでは、ベルベル

語系の住民が多く居住するアルジェリア内陸部に関し、「フランス人が到来する以前には、アウレス山地の住民の大半は名目的なムスリム」にすぎなかったのが、フランス人がもっぱらアラビア語で意思疎通をはかったために、「間接的なやり方ながら、アウレスの山地住民のイスラーム化に最も貢献したのはフランス人である」(526頁)という結果が生まれた。フランス統治下のアルジェリアにあって、「人が思うよりも多くのフランス人がアラブ化ないしカビル[ベルベル系]化し」、「アラブ化するフランス人はイスラームに改宗し、大半は隠者として篤信者の供物でもって安楽に暮らしている」(580頁)。フランス政府はイスラム教をフランス化すべく、聖職者を指名し、俸給を与えるといった介入を行なうことで、「あらゆるムスリム社会に不変の実践を蹂躪し」、かえって「厳正なムスリムは国家の給料をもらう祈祷者を唾棄」(618頁)することとなった。フランスの植民地支配をイギリスのそれと比較した場合、文化の同化を目標とする直接的統治が特徴であったと指摘されるが¹⁴⁾、その方式が宗教面ではうまく機能していなかったことがうかがえる。

訳者もあとがきで言及するごとく、少数民族に関する記述の充実ぶりも目立ち、それによって北アフリカ住民の多様性がいっそう明確化する効果を生んでいる。ユダヤ人についてはすべての章で豊富な記述がみられ、例えば「チュニアのユダヤ人はすべてスペイン風の典礼に従い」、「ヘブライ語で祈りを捧げる」ものの、「祈りのひとつはアラビア語であって」、「この祈りが最も頻繁であり、かつ女性が反復する唯一の祈りである」ばかりか、崇拜対象が変化して「ムスリムの聖人を敬愛し、その隠者を崇拜する」(196-197頁)ユダヤ人もいるという。アルジェリア・サハラでは、「原住民は湧水の創造を始原の時代の神話的君主、「二本の角をもつ」王であるドゥル＝コルネイン」に帰しており、「これはユピテル＝アモン神の息子に祭り上げられたアレクサンドロス大王としばしば混同される」(339頁)との多神教的な記述が見受けられる。アルジェリアのカビル人は、「アラブのようにコーランの章句に縛られて」おらず、「イノシシの肉でもって自らを汚しさえする」部族もいる。「彼らの典礼の大半は、キリストやムハンマドの新しい宗教よりも以前の過去

から引き継いだもののように見え、「何世紀ものあいだ、三つの宗教に適応してきた」(445-446頁)。また、サハラの子種(トゥブー)人の信仰にも「古来の宗教の残滓である迷信が保持され」(786頁)、同じくトゥアレグ人の間でも「イスラームに先立つ起源の習慣は多く残存」(814頁)していた。

これらをまとめれば、チュニジアの章における「人種よりもはるかに分断がはっきりしているのが生活類型」であり、「起源が何であろうと、都市住民と遊牧民はお互いをはっきりと区別し、まるで違う国民であるかのように扱う」(188頁)という指摘に行き着く。「一般的には地方よりも都市部、すなわち遊牧民よりも都市居住者のほうが狂信的だといわれる」(194頁)という記述は、現代の中東における都市人口の増加とイスラーム原理主義の台頭との相関を考える上でなかなか示唆的である。

評者も含め、大半の日本人にとって、本巻が扱う北アフリカはなじみが薄い地域であると思われる¹⁵⁾。本書をひもとき、現地の多面的なありようにふれることは、「アラブの春」のような現在の世界情勢を理解するためにも、大きな武器となろう。巻末のアラビア語・ベルベル語などの地名用語集が20頁弱にわたって訳されているのも、地味ではあるが高く評価される。なお、大著の翻訳であるがゆえにやむを得ない部分もあるが、本巻ではいくつかの誤植が散見された。ただし版元のホームページのほか、第3巻「アメリカ合衆国」(2016年11月刊)、第4巻「インドおよびインドシナ」(2017年9月刊)にも、それぞれ既刊分の正誤表が掲載されており、良心的な対応がとられていることを付言しておく。

(三木一彦)

〔注〕

- 1) エリゼ・ルクリュ著、柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション1 東アジア—清帝国、朝鮮、日本—』古今書院、2015、814頁。
- 2) 本巻の「訳者あとがき」によれば、副題の「地球と人間」は、前巻で「大地と人間」とあったものを、訳者が訂正したものである。
- 3) 三木一彦「エリゼ・ルクリュ著、柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション1 東アジア—清帝国、朝鮮、日本—』』歴史地理学58-3、2016、39-43頁。
- 4) 大佛次郎『パリ燃ゆ1』朝日選書、1975、184頁。
- 5) 同上『パリ燃ゆ3』朝日選書、1975、206頁。
- 6) 同上『パリ燃ゆ4』朝日選書、1975、246-250頁。
- 7) 前掲6) 245-246頁。本文は、「講義は、権利と正義の観念を強く打出したもので、実に私どもの共和政に対する信念を強く支えてくれました。私どもの内の幾たりかは、先生のお蔭で監獄から出た時には、そこに入った時よりも立派になっていたものです」と続く。
- 8) 吉村 昭『関宮林蔵』講談社文庫、1987、450頁。
- 9) その歴史については、シャルル＝ロベール・アージュロン著、私市正年・中島節子訳『アルジェリア近現代史』文庫クセジュ(白水社)、2002、186頁に詳しい。
- 10) その図録が、Rahmani, Zahia et Sarazin, Jean-Yves (dir.), *Made in Algeria : Généalogie d'un territoire*, MuCEM et Édition Hazan, Marseille et Vanves, 2016, 239p.である。また、Société de Géographie (dir.), *La Géographie : Terres des Hommes*, 1559, Paris, 2015, pp.8-43.も同展に関わる特集を収める。
- 11) I.ウォーラーズテイン著、川北 稔訳『近代世界システム4—中道自由主義の勝利 1789-1914—』名古屋大学出版会、2013、267-331頁は、19世紀の西洋における社会的背景から社会科学が成立し、その社会科学が西洋中心の世界秩序を下支えたことを論じている。
- 12) 「現在はイエローベルトと呼ばれる」との訳注がある。
- 13) ルイ9世は、第7回(第8回とも)十字軍遠征中にチュニスで病没した。
- 14) ウィリアム・H・マクニール著、増田義郎・佐々木昭夫訳『世界史 下』中公文庫、2008、299-300頁。
- 15) 北アフリカについては、山田吉彦『モロッコ』岩波新書、1951、172頁や、川田順造『マグレブ紀行』中公新書、1971、168頁が、日本人による早い時期の紀行文として貴重である。